

●特集●

第74回大会レポート

新会長挨拶

秋田 喜代美

2021年5月15日選挙で選出され、第9代会長に就任することになりました。私は2009年から2016年まで第7代会長を務めさせていただいておりましたので再任となります。しかしこの5年間で社会の状況は新型コロナ感染拡大等もあり急激に変化しました。その中で日本保育学会のこれからを見通しつつ、定款に記された本学会の目的「保育の研究を通して会員相互の交流と連携を図り、子どもたちの健やかな発達と幸福をめざし、保育界の進歩及び会員に共通する利益の向上に貢献すること」という原点に常に立ち戻りながら考え、行動していきたいと思っています。戸田雅美・大方美香両副会長と共にチームとなり学会運営にあたりたいと思っていますのでよろしくお願い申し上げます。

コロナ沈静化が見通せない中で、学会が検討すべき課題は山積しています。第1は、大会開催のあり方です。全国ブロック制が始まったのは、私が前代会長であった時からで10年で1巡し2巡目となりました。その中で初めてのオンライン学会が中部ブロックで開催されました。小林真大会委員長を始め大会関係者、中部ブロック理事評議員等準備に当たられた皆さま、汐見前会長はじめ執行部や事務局の尽力があってオンラインでも2300名を超える学会員が参集できました。保育学を研究する者が互いに知を共有し新たな知にふれ対話することの楽しさや大会の重要性を、改めて実感されたのではないのでしょうか。これまでならば興味はあっても同一時間帯に複数個所に参加できなかった発表やシンポジウム内容もオンラインだからこそ視聴でき、全国海外どこからでも旅費も時間もかからず参加できるメリットを感じた方も多いと思います。しかし、中には慣れない方法に戸惑われたり、オンラインだから参加しなかった・できなかった方もおられたかもしれません。また一体感やつぶやきの共有、双方向性などが対面でないために難しかった部分もあります。学会運営面から言えばオンラインのシステム構築のために業者委託経費もかさみ、準備委員の方にも初めてであるゆえにご苦勞をこれまで以上におかけすることとなりました。今後1, 2年間は置かれた状況の中でベストと考えうる判断決定を模索することが続き

そうです。ご理解をお願いしたいと思います。

第2には、学会全体の財務状況に関する検討が必要となっています。ここには業者委託等の経費高騰等も影響しています。健全で持続可能な学会運営のための仕組みや規程整備をしていきたいと考えます。それに伴い、受益者負担の視点から、学会参加費等に次年度から変更等もありますがこのような背景をご理解くだされば有難く存じます。

そして第3には、交流の場のオンライン開催です。汐見前会長の時から地区ブロックでの研究集会活性化が図られ、また保育政策検討委員会も新設され公開シンポジウムが開催されるなど、大会以外での研究交流の場も増加しています。オンライン開催により各地域の特色を生かした企画に全国各地からの多くの会員が参加してきています。オンラインでの活用を一時的な緊急対応手段としてだけではなく、スマートな研究集会をより発展させる方向も考えていきたいと思っています。そしてこの発展延長上で、国際交流や若手研究者ネットワークの構築推進等も積極的に進められたらと考えております。

コロナ禍での対応に追われ、通常の業務に加え新たな業務が増えている方も多いと思います。しかしこのような状況の中で少子化や過疎化も確実に進んでいます。困難な事態に直面する子どもたちや保護者、保育者や園、自治体関係者、保育者養成校教員や各種団体等保育界の方々に対し、学会はどのような貢献が可能かを考えることが求められています。これからの保育へのグランドビジョンを共に形成しながらさらなる一歩を踏み出し、子どもたちの笑顔溢れる未来に向けた希望の保育学を形成していく場に日本保育学会がなっていくこと、社会が混迷し大きく変わる時期だからこそ保育の知のグローバルコモンズを創る組織に日本保育学会がなることが必要と思います。「私は日本保育学会の会員だ」と会員であることを一人一人が誇りとし、学び対話し連帯する組織として、公共の保育に資する歩みの歴史を引き継ぎ、次世代へとリレーを続けたいと思います。そのために皆さまの率直な声をお聴かせください。どうぞよろしくお願い申し上げます。

第74回大会は、日本保育学会で初めてのオンライン開催となりました。さまざまな学会や講演会、研究会がオンライン中心となってきた中で、感じられるメリット・デメリットもあるかと思います。本号では、新会長・秋田喜代美先生の挨拶とオンライン学会の報告をいたします。

第74回大会を終えて

第74回大会実行委員長 小林 真

2021年5月15日（土）・16日（日）の2日間にわたり、初めてのオンライン大会となる第74回大会を開催しました。昨年の7月に、実行委員会としてオンライン開催の可能性を検討し、9月の理事会にてオンライン開催を決定しました。初めてのオンライン大会だったため、会員をはじめ参加者の皆様にはいろいろとご不便をおかけしました。この点につきましては、実行委員会を代表してお詫び申し上げます。

日本保育学会では、発表論文集への原稿の掲載・当日の発表・質疑応答への参加という3つの条件が揃わなければ発表が認められません。そこでWeb上で事前に発表データを公開するだけでなく、大会当日に質疑応答の時間を設けることにしました。当日の参加受付は行わず、事前に発表に目を通していただき、大会中は質疑応答を中心にプログラムを進めることになりました。

発表者の皆様には3月中にデータを提出していただくというタイトなスケジュールになってしまいましたが、多くの皆様からデータをご提供いただきました。発表者の皆様に感謝申し上げます。

3月の時点で1,419名の申し込みがあり、5月6日までにさらに713名の申し込みがありました。例年よりは大会の規模が小さくなりましたが、それでも計2,132名の参加登録をいただきました。

今回は富山国際会議場を発信拠点とし、多数のパソコンを持ち込んで同時に11会場をオープンしました。前日から様々な準備をしていただき、当日も通信障害は起こらずに大会を終えることができました。業者の皆様にも心より感謝しております。

オンライン大会の特長として、基調講演や国際シンポジウム、実行委員会企画シンポジウムはオンデマンド配信により、大会を過ぎてからも視聴できるようにしました。また公開保育を行うことができなかったため、富山県内の保育関連諸団体にお願いし「富山の保育の今（実践発表）」というコーナーを開設することができました。こちらにも多数のご参加をいただき、誠にありがとうございました。

大会中に準備委員会に寄せられたメール・チャットや、後日参加者の方々から実行委員宛てにいただいたメッセージでは、「事前にゆっくり発表内容を見ることができてよかった」というご意見が多数寄せられました。ただ、ポスター発表の座長の先生からは、30分間ですべての発表者とやり取りするのは難

しかった、というご意見も寄せられました。開設する会場の数や、1つの分科会での発表件数などにつきましては、今後の検討課題だと考えております。これらの反省点については、次の開催校にきちんと引き継いでいきたいと思っています。

初めてのオンライン大会にご参加いただいた皆様、大会を支えてくださった事務局・関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

●Profile

小林 真（こばやし まこと）

第74回大会実行委員長

富山大学 人間発達科学部 発達教育学科 教授

専門分野は教育心理学で、特別支援教育士スーパーバイザー・臨床発達心理士の資格をもつ

口頭発表K-D-1 保育内容Ⅱなど4

山路 千華

まず、今回のレポートにあたり、オンライン開催での実施を担われた大会委員長をはじめ、大会事務局、全ての運営スタッフの皆さんに心から敬意を表したい。

今回、発表の当日は質疑応答のみで、事前に投稿されている発表動画を見ておく形で行われた。所謂、「予習」が必要だったわけである。この予習のために筆者も、様々な発表動画を拝見したが、画面越しに内容がなかなか自分の中に落とし込まれてこない感覚があり、苦勞した。しかしながら、昨年来、オンライン授業を余儀なくされている学生たちの思いを知り、自身の講義資料作りについて反省もし、おおいに参考になったところでもある。

さて、ここでは、K-D-1の口頭発表について報告する。

座長も務められた角地桂子氏は〇幼稚園での子どもたちの描画を丁寧に追いながら、その描画が他者と一緒に楽しむことにより影響され、変化していくと述べている。一方でほとんど他者に影響されず、「自分の表現を永遠にできる」子どももいることに言及された。しかし、それらの子どもは、影響を受けないけれども、他者に影響を与えている場合もあるという。また、永井弘人氏は、幼児が絵画作品を鑑賞する際、保育者が子どもたちと一緒に鑑賞する中でオノマトペを活用することで、一定の効果が期待できるとしている。いずれも、子どもたちの感性というものが、ただ一人だけで生まれてくるものでは

なく、友だちや保育者などの他者と相互に影響し合いながら進化、深化していくものであることが良く理解できる発表であった。

藤岡郁子氏らの発表では、保育者を目指す学生が表現の授業内において、わらべうたを手掛かりに造形活動に繋げていく体験により、実習で活用できる「表現」について学ぶ授業プログラムの紹介があった。先の、永井氏は、養成校での授業で、表現領域は特に様々な分野の教員がオムニバスで担当する場合も多く、その難しさについて指摘している。横井一之氏は、保育実習室でのメダカ飼育の効果について、「環境」と「表現」という2つの領域からの視点で述べている。環境領域もその内容の幅広さから、表現領域と同じように複数教員で担当している養成校も多いと感じるが、そもそも、「領域」というものが教科教育とは異なる側面を持ち、そこが、保育実践の場での子どもと多様な文化を繋ぐ保育の面白さや、限らない子どもの感受性と表現力を感じられる部分となる。

鬼頭弥生氏らは、日本語を母国語としない子どもの人間関係構築についての研究に際し、多くの先行研究を丁寧に分析し発表され、非言語コミュニケーションの可能性に触れられていた。

本分科会の発表ではどれも、「繋がり」という視点があるものであった。保育の中で他領域をまたいで行われる表現や環境のアフォーダンス等が、子どもの感性へ多様な働きをもたらす可能性を感じ、倉橋惣三の「教育はお互いである」という一文が思い起こされ、筆者自身、多様な学びを得ることができた。

●Profile

山路 千華（やまじ ちか）
白鷗大学 教育学部 発達科学科
国立音楽大学幼児教育専攻を卒業後、国内外の幼稚園に勤務。保育者養成の道へ入ってからは、学生が保育の場に身を置く自分をイメージできるような講義をモットーに、実習指導、保育者論、保育内容指導法（環境）等を担当している。近年は大人の遊び心研究に注力している。

ポスター発表「家庭保育・家庭及び地域の連携・子育て支援など 3」

柴田 千賀子

今大会のテーマは、「つながる、広がる、深まる」であった。新型コロナウイルス感染拡大の中、日々の生活の中で人と人とが「つながる」こと、「広がる」こと、「深まる」ことの重要性を改めて考えさせられている。それは、保育実践や研究においても同様である。本大会では、初めてのオンライン発表という試みにもかかわらずポスター発表件数が500を超えた。オンライン形式では対面での対話がかなわず残念、という思いの一方で、発表資料掲載期間中（4月

22日～5月16日）オンライン視聴サイトにコメント投稿できるなど、これまでにないシステムのおかげで時間をかけて研究に向き合わせていただいたのも事実である。本大会では、新型コロナウイルスの感染拡大が保育や子育て支援にどのような影響を及ぼしているのか知見を深めたいと考え、「家庭保育・家庭及び地域の連携・子育て支援など 3」の分科会に参加した。

「コロナ禍に親子が集う『広場』の意味—子育て支援広場における遊びと交流の場の保障—」では、集うことが困難である状況下において営まれた、桜の聖母短期大学子育て支援広場での実践から得られた研究成果が報告された。保護者同士の語り合いが安心感を醸成したこと、学生の「遊び観」転換など、自由な語りの場や開放的な遊びを保障する広場の意味が明らかとなった貴重な研究であった。身近な地域コミュニティの関係性の深まりが、「生活状況の変化に向き合う家族のしなやかな回復の一助となりうる」との考察は、今後の実践を考える上での重要な示唆となった。「コロナ禍における大学生による地域子育て支援活動—非対面型による実施—」は、高知大学教育学部幼児教育コースで2015年度より実施されている地域子育て支援広場が、はじめて非対面で実施されることになった際の学生の学びについて、KHCoder（3.Beta.01e）を用いて分析した研究である。分析の結果、「協力—作成—グループ」「活動—協力」といった共起ネットワークが示され、地域子育て支援活動に参加する学生が、協力することの重要性について学びを深めていることが明らかとなった。コロナ禍における学生の学びについて考察された興味深い研究であった。「音楽アウトリーチによる保護者支援の可能性—コロナ禍における幼稚園の取り組み—」は、コロナ禍において筆者らのそれまでの実践とは形を変えて実施することになった、A幼稚園保護者を対象とした音楽アウトリーチの事例研究である。参加者へのアンケート調査と、A幼稚園園長へのインタビュー調査の分析により、多くの参加者が「豊かで充実した心地」を得たことが明らかになり、音楽アウトリーチによる保護者支援の可能性が示された。

分科会の全ての発表において、チャット機能を活用した質疑応答が活発に行われた。困難な中でも真摯に研究に向き合う会員の姿勢から、これからの研究への刺激をいただいた。最後に、コロナという脅威に立ち向かいながら、本大会を開催くださった中部ブロックの先生方、関係者の皆様に、心からの敬意と謝意をお届けしたい。

●Profile

柴田 千賀子（しばた ちかこ）
仙台大学体育学部子ども運動教育学科 教授
子ども理解の深まりや子育て支援についてフィンランドとの比較研究を継続中

小学校との円滑な接続を目指して —富山県内の取り組みから—

田爪 宏二

本シンポジウムでは、大会の開催地である富山県における、小学校との円滑な接続を目指した保育現場の取り組みの実態と課題をテーマに議論がなされた。冒頭に、企画者である小林 真氏（富山大学）より、教育（・保育）要領、保育指針、学習指導要領の改訂（定）をうけ、幼児教育・保育と小学校との接続が重視されるようになった現状と、そこにおける課題が示された。

続く話題提供では、まず吉田真寿美氏（富山県教育委員会）より、富山県におけるこれまでの幼・保・小接続の取り組みの現状や、接続期におけるアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムである「幼・保・小 学びをつなぐ『わくわく・きときと』カリキュラム」の策定とそれに基づく保育実践のガイドである「『わくわく・きときと』接続ガイド」を活用した研修、また富山県が接続期において重視する「自分づくり」「かわりづくり」「学びの基礎づくり」の視点が紹介された。続いて、青山 仁氏（富山県幼児教育センター）より、幼児教育研修の充実を目的として同氏がスーパーバイザーとして参画してきた富山県幼児教育センターにおける保育現場への訪問研修の取り組みについて報告がなされた。その中では、小学校との連携に向けた教育課程や指導の工夫に関する研修について紹介されるとともに、保育現場において「資質・能力の3つの柱」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を適切にとらえて保育に生かすこと、幼児教育に対する保護者の理解を深めること、子どもの育ちや学びを保育現場・小学校・保護者が共有すること、そして保育者自身の学びを深める機会としての研修の重要性が指摘された。鶴見真理子氏（富山大学人間発達科学部附属幼稚園）からは、大学附属の幼稚園と小学校との連携・協働の取り組みとして、幼稚園の年長児の担任と小学校1年生の担任がそれぞれの保育や授業を担当する交換保育・授業や、幼児と小学生の交流活動の実践が紹介され、その効果と交流活動の実践上の課題が指摘された。その上で、幼稚園での経験が小学校教育にどのように関わるのかを踏まえながら幼稚園、小学校がともに保育・教育を考えていくことの必要性が述べられた。

最後に企画者の小林氏により指定討論と総括が行われ、接続教育とともに幼児期とそこにおける教育・保育固有の意義を捉えることの重要性が提起された。

子どもの学習や発達には、子どもが直接関わる人的・物的環境はもちろんのこと、生態学的視点では子どもをとりまく環境同士の関係も大きく影響すると考えられる。また、教育（・保育）要領、保育指針は全国共通ではあるものの、それに基づく保育実

践は、各地域の実態や特色に根ざしたものであることが肝要であると考えられる。これらの点から、本シンポジウムでは富山県の取り組みについての興味深い実践を伺うとともに、筆者自身の地域の特性を踏まえた接続教育のあり方について改めて考えさせられる有益な機会となった。

●Profile

田爪 宏二（たづめ ひろつぐ）

京都教育大学 准教授。

専門は発達心理学、認知心理学。近年は幼児期、児童期における認知発達とそこにおける教育的支援、また大学生の認知的個性を活かした教師・保育者養成の高度化に関心を持っている。

国際シンポジウムドイツにおける保育の現状 と質の維持について—乳児保育の視点から —ドイツのコロナ禍の保育について—

内田 将平

新型コロナウイルス感染症拡大により、昨年の大会においては残念ながら開催が断念された国際シンポジウムが、多くの会員の切望のもと、ついに本大会にて開催された。今回行われたシンポジウムでは、ライプツィヒ大学のフィーニッケル氏（Prof. Dr. Susanne Viernickel）がドイツの保育についてご講演された。私は数年前、ドイツ心理学学会のカンファレンスに参加した際に、フィーニッケル氏の刺激的な講演をうかがったことがあり、今回も多く学びを得る貴重な機会となると思い参加した。

本大会のシンポジウムは、基調講演、指定討論、質疑応答の順で行われた。基調講演では、フィーニッケル氏が「ドイツにおける保育・幼児教育—現在の課題と挑戦—」という演題で発表された。具体的な講演内容として、まず冒頭で、旧東西ドイツ地域特有の事情をふまえつつ、保育政策をめぐる政治的・財政的な状況や、保育者養成の課題などを概観された。次に、構造の質と保育者の心身の健康との関係に着目した自身の示唆的な研究を紹介され、保育の質を語る上でも健康生成論のパースペクティブを考慮していくことの重要性を示された。この点はフィーニッケル氏の講演の中でも特に貴重な知見であったと考えられる。さらにフィーニッケル氏の長年の研究対象である乳児保育に関しても言及がなされ、不安定な愛着形成、保育者資格の不明瞭な基準など、乳児保育が直面している様々な問題点を挙げ、これらに対して、一人ひとりの乳児のウェルビーイングを見極めるための理論構築が急務であるとの指摘がなされた。最後に、コロナ禍の保育についても情報提供され、ドイツの保育においてもこの一年でデジタルメディアの活用が促進された一方で、パンデミック下における乳幼児の発達やウェルビーイングに関するデータがいまだ不十分であることが課題として提

示された。

続く指定討論では、まず秋田喜代美氏（学習院大学）が、保育の質をめぐる議論について、国際的な研究の動向とも比較されながら日本の状況を整理してくださった。また中西さやか氏（佛教大学）は、ドイツの保育に関する自身の研究の知見をふまえながら、保育の質をめぐる議論に子どもの視点を取り入れることの重要性を示してくださった。加えて司会の日浦直美氏（関西学院大学）が、移民の割合が高い保育施設で働く保育者の困難さについて問題提起をしてくださった。同じく司会の七木田敦氏（広島大学）からは、ライプツィヒ大学内に設置されたFRÖBEL幼稚園の実践例について、訪独の際に撮影された写真などを交えつつ話題提供をしてくださった。こうした資料の提示は、フィーニッケル氏の講演内容を理解するうえで大きな助けとなった。

最後に質疑応答では、フィーニッケル氏が、社会的に不利な子どもたちが質の高い保育を受けることができるようにするための具体的方策や、保育者の生活の質の豊かさに向けて保育学が担う役割などについて話された。本シンポジウムは、日本における保育の質をめぐる議論に一石を投じる刺激的なシンポジウムであった。

●Profile

内田 将平（うちだ しょうへい）
ケルン大学大学院人間科学研究科教育学専攻 博士後期課程2年
桜花学園大学保育学部 非常勤講師
研究テーマはドイツの幼児教育。特に「Bildung」概念をめぐる議論の原理的再検討。近著に「現代ドイツの幼児期のカリキュラムにおける自己形成アプローチの意義：NRW州2003 年版・2016 年版の検討を通して」『国際幼児教育研究』vol.27（2020年）がある。

子どもの発達格差のために保育が果たす役割とは

上村 晶

2021年5月15日、第74回大会の基調講演として、京都大学大学院文学研究科准教授の森口祐介先生に「発達の格差と保育の役割」という演題でご講演いただいた。実行機能の研究をご専門とするお立場から、「今を生きる子ども」と「未来に向かう子ども」の狭間に生じる発達格差の在り様や、格差縮小のために保育が担う役割について、多様なデータを交えながらわかりやすくお話しくださった。

乳幼児期には、主要な養育者が安全基地として機能しながら、子どもと愛着を形成することが重要である。その際、養育者との関係は徐々に子どもに内在化され、自己や他者の捉え方・自他関係などの認知枠組みを形成していく。例えば、向社会的行動に着目すると、目の前のことを優先する「今を生きる子ども」は利己的選択をする一方、他人を優先（未来の自分を優先）する「未来に向かう子ども」は、

一時的に不利益が生じても将来的に利益を得る可能性がある利他的選択ができる。このような向社会的な子どもは、その後の学業成績や友人からの人気、健康にも利益をもたらすと言われている。

同様のことが、目標のために行動をコントロールする実行機能にも言える。実行機能には、感情面（欲求の制御など）と思考面（癖・習慣の制御など）の2側面があると同時に、幼児期に著しく発達すること、30年後の健康・経済状態・収入などを予測することが様々な研究から見出されている。特に、有名なマシユマロテストは、実行機能を測る課題として社会的に広く認知されてきた一方、近年では実行機能だけでなく初めて出会う他者（実験者）への信頼も反映しているのではないかという知見もあり、「マシユマロテストが何を測っているか」という議論にも発展している。

他者を信頼できない子どもは今を優先する一方、他者を信頼できる子どもは未来に向かうことができ、そこに発達格差が生じると考えられている。しかし、この格差は決して、発達が遅れていることを意味しているのではない。周りの大人を信頼できない環境や貧困下で育った子どもは、今を優先させることが多いが、それは現在の環境に適応しようとしている結果であるとも捉えられる。幼児期に生じた発達格差は、基本的に何もしなければ維持・拡大の一途を辿るが、脳科学分野では青年期に実行機能や向社会的行動の再編成が生じることが見出されており、一部の子どもは教師との関係性に基づいて発達の径路が変わりうると考えられている。

よって、保育者と温かい関係を構築できた子どもは発達径路が変わる可能性があり、保育が果たす社会的役割がいかに重要かを物語っている。保育者は、幼い子どもの安全基地になりうる存在として関係を育むことができる。また、親子関係が安定していない場合には、特に重要な存在となり、保育者との関係構築によって他者への信頼が芽生えることで、子どもは徐々に未来を向くことができるようになる。その他、社会情緒的スキルを高めるような園での活動・多様なプログラム・家庭支援なども含め、格差縮小に資する保育の役割は、今後より一層期待されていくと言えよう。

今回のご講演は、多くの保育実践者・研究者にとって、示唆に富んだ意義深い内容であったと言える。2021年6月に森口先生の新書『子どもの発達格差』（PHP文庫）も発刊されたため、ご一読いただきながら、多くの会員のみなさまとさらに理解を深めていきたい。

●Profile

上村 晶（うえむら あき）
桜花学園大学 保育学部保育学科教授（博士：人間文化）
専門は幼児教育学・保育学。保育者の子ども理解や、保育者と子どもの関係構築プロセスに関する研究に取り組んでいる。保育者が子どもとわかり合おうとする意識変容に関するフィールドワークや、保育現場への研修・講演などにも携わっている。

保育政策検討委員会 第2回公開シンポジウム

日 時：2021年10月30日（土）13時～16時

会 場：ZOOMを用いたオンライン方式

テーマ：保育・幼児教育の政策の最前線

— 継続性を保障する保育政策 —

趣 旨：幼児教育・保育の無償化の実施以降、国及び地方自治体において、保育・幼児教育の質向上に関わる政策が進められています。今回のシンポジウムでは、現在、国が進めている保育・幼児教育質向上の取組と、自治体による継続した保育・幼児教育質向上の取組について話題提供いただき、継続性を保障する保育政策とその研究の課題と展望を皆様と考えます。

話題提供：第1部 保育・幼児教育の質向上に関わる国の取組

大豆生田啓友、神長美津子、清水益治

第2部 保育・幼児教育の質向上に関わる自治体の取り組み

浦安市・佐世保市及び高知県の取組み

申込方法：会員受付は2021年9月1日～10月22日

定員に達し次第締め切らせていただきます。

申込は以下のQRコード、URLのフォームからお申込みください。

<https://forms.gle/ZiSm8BY1z63mU39C7>

問い合わせ先：日本保育学会 保育政策検討委員会

hoikuseisakuinkai@gmail.com

* 詳細は同封のチラシや学会HPをご覧ください。



■ 『保育学研究』 完全電子投稿 ■

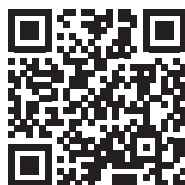
2021年5月の投稿より、郵送投稿の受付は廃止され、電子投稿のみの受付となりました。

編集常任委員会では、電子投稿にかかわる「執筆要項」「執筆のための手引書」「引用文献表記」を作成し、随時ホームページに公開しています。

最新の情報、詳細につきましては、ホームページにてご確認ください。

詳細はホームページをご確認ください

http://jsrec.or.jp/?page_id=53



◆ 主要国際保育系学会への若手派遣について ◆

日本の保育学研究の進展のため、海外の保育学系の学会等で研究発表をする若手会員の支援をしています。

募集期間：1期：2月～5月、2期：6月～9月、3期：10月～翌年1月

金 額：1名につき、上限額10万円

条 件：筆頭発表者として研究発表を行う

申請希望者は、学会ホームページ「会員の皆様へ」→「各種委員会関係」→「国際交流委員会」→「国際交流若手派遣について」をご覧ください。

日本保育学会研究奨励賞を受賞して

〈論文部門・保育学研究 第57巻 第2号〉

私立保育所保育士の賃金の低下と影響要因：1980年以降の都道府県別時系列集計データによる実証分析

小林 佳美

このたびは、2019年度の研究奨励賞（論文部門）を賜りまして、査読や選考でお世話になりました先生方をはじめ関係の諸先生方に心より感謝申し上げます。

本研究は保育者（保育士・幼稚園教諭）の賃金が1990年代～2000年代を境に相対的な低下をみせた要因を検討するために、保育施策、及び女性の働き方の地域差と時系列変化に着目して分析を試みた2部作のうちの一つです。都道府県別の集計データを活用した分析により、地域差や自治体の施策、地域の子どもの数の格差や時系列変化といったマクロな要因と、保育者の平均的な処遇との関連を、これまで積み重ねられてきた理論研究をベースに、データによって検証した点が、一つの研究の成果であると考えております。しかし、修士論文をベースにしており、論文末尾に示しましたように、課題の多い研究でもあります。ですから、この研究でただ一つ、胸を張れることを挙げさせていただくとしたら、保育の質の中核をなす要素の一つとして保育者の就労環境の改善に関心が高まるなかにあっても、その状況を実証するだけの量的データの蓄積が乏しい本領域において、限られたデータをいかに活用できるかを考え抜き、諦めずに分析手法の学習を重ねたことでしょうか。

私の、現在の主な研究関心は、保育者の方々が生き生きと働き続けられる園であるために有効な、所長・園長、或いはミドルリーダー層のマネジメント・リーダーシップの工夫や、国・自治体の保育施策について、実証的に解明できないかということです。また、実証研究のプロセスや成果を、いかに保育の現場に活用していただけるものとするのかということを、現場の先生方に学ばせていただきながら模索しているところです。今回の受賞を励みに、より一層精進していきたいと思っております。

●Profile

小林 佳美（こばやし よしみ）
お茶の水女子大学大学院博士後期課程在籍。
近年の研究テーマは、保育者の職場定着における組織要因の解明、保育者の職務環境の国際比較、幼児期の科学的探究心の芽生えと保育・養育環境の関連。

〈論文部門・保育学研究 第57巻 第3号〉

研究奨励賞（論文部門）を受賞して

本岡 美保子

本論文に研究奨励賞を与えてくださった選考委員の先生方、並びに査読の先生方、日本保育学会の皆さまに、深く御礼申し上げます。七木田敦先生をはじめ、広島大学大学院附属幼年教育研究施設の教職員の皆さまや先輩方、執筆時の所属園の皆さまなど、多くの方の支えによって、このような素晴らしい賞をいただけるような論文を書くことができました。ありがとうございました。

この論文は、「葛藤が生起する場としての保育」というテーマを受けて、執筆したものです。保育者である「私」と子どもとの葛藤の相互作用を書きましたが、執筆時には執筆者としての葛藤もありました。自分の思いを伝えたいという気持ちと、どこまで書くのか、そもそも書いていいのか、そんな苦悩の中で揺れ動いていました。それは、この論文のような研究方法で研究する限り、今後も感じ続けることになる葛藤でしょう。

その後は保育者養成を担う教員として、新たな葛藤も経験しました。研究がしたいという気持ちと、研究に時間を費やすことが、学生への教育を妨げることになるのではないかという危惧との間の揺れです。そんな私に、ある先生はこうおっしゃいました。「あなたのいう学生とは、目の前にいる学生だけのことですか」と。その時私には、はるか彼方まで伸びる一筋の光の先に、保育を志すたくさんの学生の姿が見えたような気がしました。そしてこの度の研究奨励賞は、その光の源となって、私の側で歩むべき道を照らしてくれています。生きている限り、この光は私の側から消えることはないでしょう。

先日初めて、この論文を授業でも読んでみました。私が論文を通して伝えたかったことが、学生に届いたことを実感し、研究者が教育をすることの意味が少し、わかった気がしました。今後も研究を重ね、保育を志す多くの学生や、子どもの幸せを願う多くの保育者や研究者の心に届くような論文を書きたいと思っております。

●Profile

本岡 美保子（もとおか みほこ）
広島都市学園大学子ども教育学部子ども教育学科講師
これまで、乳児保育における子どもと保育者との関係を研究してきました。現在は、親子分離時の子どもと保護者、保育者、それぞれの葛藤にも関心を持っています。また共同研究として、保育記録や保育者の研修、保育におけるわらべうたの意義などを研究しています。

日本保育学会研究奨励賞を受賞して

〈論文部門・保育学研究 第58巻 第1号〉

研究奨励賞（論文部門）を受賞して

庭野 晃子

この度は、日本保育学会、研究奨励賞（論文部門）を受賞できましたこと、誠にありがとうございました。調査に協力してくださった全国の保育従事者の方々と、編集委員会の方々、また今回の調査研究の手続き等々で支援をしてくださった白梅学園大学の教職員、調査会社の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回奨励賞をいただきました研究テーマである、「保育従事者の離職意向の規定要因」に関して、約8年に渡り調査・分析を行ってきました。その結果、「勤務の融通が利くかどうか」と「仕事と家庭の両立」が重要な要因であることが明らかになりました。働き方が多様化している今日、それぞれの事情に応じた働き方を選択できるような勤務体制をつくるのが、保育施設を運営する側の今後の課題となるのではないかと認識しております。

2018年よりスタートした「働き方改革」は、各都道府県が「働き方の改善」と「休み方の改善」についてそれぞれ独自の制度を提案しています。都内のある保育施設では、国の制度をうまく利用し「働き方改革」を推進しています。その保育施設では「働き方プロジェクト」を立ち上げ、時間単位で取得できる有給休暇や子育て中の職員が利用できる短時間勤務制度、役職に就かなくてよい限定職員制度、子どものお誕生日休暇、子ども連れ出社制度等をつくり人材確保の安定に寄与しています。このように国の制度を利用し工夫することで柔軟な職場の勤務体制をつくっていくことは十分可能です。「勤務の融通」と「仕事と家庭の両立」を意識した職場体制づくりは、保育従事者の離職を防ぎ、子どもの安全や保育の質の向上に大きく貢献すると考えています。

〈発表部門・第72回大会 口頭発表〉

研究奨励賞（大会発表部門）を受賞して

佐々木 美和

この度は、栄えある研究奨励賞にお選びいただき誠にありがとうございます。このような栄誉は自分に縁のないものと思っておりましたので、受賞の通知を受けて、唯々驚いております。コロナ禍により、授賞式はリモートによる開催となりましたが、ご準備ご配慮いただいたことに心より感謝申し上げます。

私は現在、聖徳大学大学院博士後期課程に在籍し、日本の児童文学を児童学の視点から調査・考察し、その新面目を呈することを目指しております。受賞対象となった研究発表「羽仁もと子の児童読み物観について―『思想しつつ生活しつつ』の実践としての読書―」（第72回研究大会）も、この探究活動に連なるものです。当日の研究発表で、羽仁もと子の筆によるお伽噺集『子供読本』の口演性を報告した際、実際に『子供読本』を園児への読み聞かせ教材として活用されている青森県所在の幼稚園の園長先生とお話しする好機を得ました。自身にとって、研究が保育実践と繋がることの重要性に触れた、忘れられない研究大会となりました。

授賞式が終わった今思うことは、この栄誉は決して自分だけの成果ではない、ということです。何より、長らくご指導いただいている阿部真美子先生に深甚なる謝意をお伝えしなければなりません。また、非常に照れ臭いのですが、この場をお借りして、自分を育て支えてくれた家族にも感謝の言葉を伝えたく存じます。

この度の表彰は、私にとって身に余る栄誉であるばかりでなく、これまでの研究活動を振り返る良い機会となりました。研究はまだ道半ばですが、大学院生としての道程は間もなく終幕を迎えます。受賞を励みに驚馬に鞭打って邁進いたします。また、学会での活動を通じて人との絆を大切に、新しい出会いに期待して、頑張っ参ります。今後ともよろしくお願いいたします。

●Profile

庭野 晃子（にわの あきこ）

白梅学園大学

保育士養成校に勤務後、保育従事者の離職に関して研究をしています。現在は白梅学園大学子ども学部で、家庭支援論等の講義を担当しております。今後の研究課題として、新任・中堅・ベテラン別に、離職意向の規定要因を明らかにし、各キャリアに応じた支援について提案していきたいと考えております。

●Profile

佐々木 美和（ささき みわ）

川口短期大学

現在、川口短期大学こども学科（埼玉県川口市）で、子どもの言葉や児童文化の科目を担当し、幼児教育者・保育者の養成に携わっております。日本の児童文学や児童文化を研究対象としており、目下、明治・大正期の児童向け読み物について、文献を通してその観念の変遷や変容について調べています。

日本保育学会研究奨励賞を受賞して

〈発表部門・第72回大会 口頭発表〉

研究奨励賞（大会発表部門）を受賞して

松田 こずえ

2018年2月14日の午後、私はお茶の水女子大学の大教室でノルウェーのアーナ・ソールバルグ首相の講演を間近で聴く機会を得た。瀟洒なスーツを着こなした首相はジェンダー平等に関する多くの質疑に当意即妙に応じ、会場を魅了した。私は首相の話に感銘を受け、ノルウェーの幼児教育における公平性への関心を深めた。その後、ノルウェーを訪問する機会に恵まれ、何かに導かれるかのように、幼児教育の研究者であるエミルセン教授、ノルウェー科学技術大学（NTNU）のジェンダー研究所の教授陣、ノルウェーの保育施設の園長や保育者、保育行政担当官、在日ノルウェー大使館の方々など、数えきれない多くの幸せな出会いの中で研究を進めることができた。

20年ほど遡って2001年9月11日のお昼すぎ、私はNYマンハッタン最南端の公園内のレストランに逃げ込んでいた。ビルが崩落した同時多発テロの現場近くの自宅アパートを出て、降りかかる灰から身一つで避難していたのだ。不安と恐怖との当時の強烈な記憶の中で、忘れられない光景がある。膝から血を流し泣き崩れる若者、けたたましい消防車のサイレンの音、何が起きているのか分からず不安な人々で溢れたフロアの一角に、近隣の保育園から避難してきた一団がいた。騒然とした空間で自らを囲むように子どもたちを座らせた保育者は歌を口ずさみ、皆で手遊びをしていた。おそろくいつものように。保育者たちは穏やかな表情のまま子どもたちを見守っており、その姿に胸が熱くなった。日本で保育者をしていた私が、他国の保育について学ぼうと思った原点である。

名誉ある研究奨励賞をいただき、日本保育学会、研究を通じた多くのご縁、そして指導教官の導きにあらためて感謝したい。研究の原点である20年前の危機的状況下で接した勇敢なアメリカの保育者や、ノルウェー首相へのリスペクトの念を決して忘れることなく、今後はさらに研究の射程を広げていく所存である。

●Profile

松田 こずえ（まつだ こずえ）
お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
人間発達科学専攻 保育・児童学領域 博士後期課程
フェリシアこども短期大学国際こども教育学科専任講師
【研究関心】①ノルウェーの幼児教育における公平性の醸成に向けた取り組み、②自然環境・室内環境と保育

〈発表部門・第72回大会 ポスター発表〉

研究奨励賞（大会発表部門）を受賞して

山田 恵美

この度は日本保育学会の研究奨励賞（大会発表部門）を賜ることとなり、大変光栄に存じます。心より感謝申し上げます。

私自身はもともと建築分野の出身であり、当時から保育空間の研究をしておりました。その際に心がけていたのは、ソフトの面に偏って着目しがちな保育研究においても子どもの行動を可視化して客観的に捉えることと、さらにそこから保育の現場に活かせる知見を得ることでした。今回の研究では、私が建築分野で身につけた研究手法と、現場の立場から分析できる、共同研究者である小林直実氏の視点を組み合わせることで、それがより意義深く可能になったと考えています。

この研究は降園活動時の子どもの着座位置という、空間的な指標を客観的に目に見えるものとして抽出し、そこに反映された、その場所を選んだ子どもの人間関係を長期的な観察から考察しています。年齢による人間関係の特徴を、クラスの関係性の育ちという視点と個々の子どもの特性という視点から分析することで、子どもがどこに誰と座るかという情報から、その子どもの人間関係をある程度客観的に把握するための手がかりを提供することを試みました。選考理由の中でこうした着眼点や分析手法を評価していただけたことを嬉しく思います。

また、少し気になる着座をしている子ども達も年齢とともに友達関係を広げたり、クラスに馴染んだりしていく様子が見られ、その子なりの人間関係の発達が見られました。これらの分析は同じ子ども達を入園から卒園まで継続して観察した縦断研究の結果といえ、時間をかけて取り組んだ研究の成果について評価していただけたことは、今後の研究に向けて大変励みになります。

今後も実際の保育に活かしていただけるよう、客観的な示唆を得られるような研究に精進してまいりたいと思います。皆様のご指導ご鞭撻を賜れましたら幸いです。

●Profile

山田 恵美（やまだ えみ）
東京家政大学家政学部児童教育学科 講師
幼児教育学に携わる前は建築分野にいたため、建築計画的視点、幼児の発達の視点からの保育環境を主な研究テーマとしている。

日本保育学会保育学文献賞を受賞して

保育学文献賞を受賞して

川田 学

『保育的発達論のはじまり』を世に出すにあたり、私には大きく二つの願いがありました。一つは、タイトルにも現れていますが、「発達」と「保育」の関係を再考したいということです。これは、発達心理学を専攻してきた私自身の認識と方法をリフォームする過程を含んでいます。歴史的に、発達研究は保育実践の方法と価値に多大な影響を与えてきましたが、再現性を重視する自然科学的な認識論と、個別性・一回性に向き合わざるを得ない保育実践における人間理解には、依然として溝があります。また、保育は、それぞれの地域で実践が成り立ってきた経緯や生業との関係、民俗や子ども観などと不可分であり、個人を分析単位とする発達心理学の道具立てには自ずと限界があります。文化的な営みとしての保育と子ども理解の支えとなる発達理論／人間形成論には、いまだ広大な研究のフロンティアがあると考えています。本書で、その端緒をえようと思いました。

もう一つの願いは、集団で読み合うことを通して、保育と社会について対話する回路を開くためのテキストになってほしいということでした。ネット社会は個人で情報収集しやすい反面、個人で理解できないことはスキップされてしまう傾向があるので、“分かりやすさ”が喧伝されがちです。でも、どこまでいっても保育には答えがないように見えますので、“分からなさ”に対する構えをどう養うかが保育を豊かにするためには必須だと考えます。本書は、実践事例も多く取り入れています。記述と論理の水準は落とさないように心がけました。保育者に読んでほしい。でも、だからこそ、引用文献と注にもこだわる。そういうコンセプトで書きました。集団で読み合うことで、分からなさの中に言葉と実践の糸玉がほどけていくワクワクを感じてもらえたら望外の喜びです。

拙著を受賞にいきなってくださったみなさまに、心より敬意と感謝をお伝えします。

●Profile

川田 学（かわた まなぶ）

北海道大学大学院教育学研究院・准教授。発達心理学と保育実践の間をウロウロしています。院生時代から研究テーマを答えることに窮してきましたが、基本的に事象の“成り立ち”に関心があります。最近では、ある保育の場が生まれた経緯やその実践に人びとがどのような願いや期待を持ち、また変わってきたのかに関心があります。

保育学会第57回保育学文献賞を受賞して

青木久子・松村和子

現場人として半世紀余、幼児教育に関わってきただけに、私立幼稚園及び関係者の寄付に支えられてきた本賞の受賞は、共著者松村和子氏、現場の教師・保育士のみなさん、出版関係者、子どもらへの感謝の贈り物と思っている。

現場は混沌を抱える日々だからこそ、生きている実感が湧いてきて面白い。子どもの、環境からアフオーダンスを見いだす力、果敢な試行錯誤、躊躇し足踏みし恐れおののく姿などが、様々な研究課題を提供してくれる。“場所を生きる者”の論理は机上の学者とは異なる。実践の基底・真諦となるもの、つまり自らの行為の核となる哲学がなければ情性に見舞われ、時代や人に流されて自分を見失う。それでもなお子どもの生活に、個々の存在する意味を見いだすことを諦めない強者たちである。その現場人に知性と勇気を提供し、自らの内に実践哲学を打ち立てる過程を支えるのが「学」であろう。

実践の継続は研究の継続でもある。松村氏は大学を辞して幼稚園現場に身を置き、若者にエールを送りながら多世代、多種多様な教職員と“実践即研究”に励んでいる。私は後期高齢者の歳を過ぎ農林業に勤しんでいるが、現場からもらっている研究課題はいまだ山積している。改めて、現場人が己の実践哲学を打ち立てるために知性と勇気を提供する「保育学・幼児教育学とは何か」を模索している。

●Profile

青木 久子（筆）

AEER（青木幼児教育研究所主宰）幼稚園・こども園等顧問、理事、臨床発達心理士の仕事は継続中。知の探究シリーズ第20巻「保育学へのアプローチ」を執筆の傍ら、現場の研究や実践の整理を手伝わせてもらっている。

日本保育学会保育学文献賞を受賞して

保育学文献賞を受賞して

福元 真由美

このたびは、日本保育学会保育学文献賞という栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。大変嬉しく思いますとともに、研究への思いを新たに身引き締まる気持ちです。

『都市に誕生した保育の系譜—アソシエーションイズムと郊外のユートピア』は、1920年代から1930年代の日本の都市部で、地域の協働を志向する保育所と新中間層のニーズに呼応した郊外の幼稚園の保育の特徴を描いたものです。本書の内容については、保育学研究の書評で西本望会員がさまざまな観点から詳しく取り上げてくださり、身に余る評価をくださいました。この場をお借りして、書評の労をとってくださった西本会員にお礼を申し上げます。

本書は、大学院修士で始めた研究をまとめたもので、研究を進める上で会員の方々から多くのご助言、励ましをいただきました。研究発表の際に資料の別の解釈を提案して下さったり、資料の所在を教えてください下さったり、貴重な資料を貸して下さったりした先生方のお力添えなくしては、研究を磨くことはできませんでした。

特に忘れられないのは、元学会長の柴崎正行先生のお言葉です。志賀志那人の大阪北市民館保育組合の事例を、院生で初めて口頭発表をした際に、部会の座長をしていらしたのが柴崎先生でした。そして部会の終了後に「この研究はこれからの保育で重要だと思うから、ぜひ続けてほしい」と言ってくださいました。それから自らの研究の意義を言葉で説明しなければならない時、私の感覚は保育を真摯に考える方々に共有してもらえるかと問うたびに、柴崎先生のこのお言葉に何度も励ましていただきました。あらためて柴崎先生のご冥福をお祈りいたします。

最後に、いわゆる研究が「知的な冒険」にたとえられることはしばしばあります。研究の初心者として挑んだ初めての冒険である本書では、浮き足だつてあちこちをつついたり、大小の沼にはまったり、大事なメッセージを読み飛ばしたりしていることが多々あると思います。それらをこの本を手にした皆さまからご指摘いただき、議論を交えることを通して、また新しい冒険の場が保育の歴史、そして保育学の研究に生まれることを願っています。

●Profile

福元 真由美（ふくもと まゆみ）

青山学院大学教育人間科学部

研究テーマ

戦前の幼稚園と保育所の保育の思想、カリキュラム、実践の歴史／戦後の日本における知的な教育の展開／幼小接続のカリキュラムと政策の動向

会報第182号原稿の募集

広報委員会では、以下の原稿を募集しています。ふるってお寄せください。

①海外レポート

研究や視察などで海外へ行かれた方や、海外在住の方は、海外の研究動向や保育に関わる情報を紹介してください。

②新刊図書の紹介

過去2年間に初版として出版された他者の図書で、興味深いもの、保育にとって有意義と思われるものを、感想を含めて紹介してください。ジャンルは問いません。

③私の文献リストから

研究や実践のために参照されている文献リストをご紹介ください。文献は、著書、論文など15冊(編)以内。内容の紹介は必要ありませんが、外国語の文献については、邦訳を付けてください。また、ご自身が、その文献を使って研究しようとしている(関心をもっている)分野についても、お書きください。

【字 数】 ①800字以内(写真1葉は200字に換算)

②400字以内

③800字以内

【締め切り】 2021年9月30日必着

【送付先】 Mail: hoiku@main.so-net.jp

作成いただくデータはWord (windows) ファイルでお願いします。ファイル名にご自身の氏名を記載してください。

メールには、氏名、会員IDを明記してください。

◆会員管理システムが変更となりました◆

下記URLにアクセスし、ご登録いただいているメールアドレスをご入力の上、パスワードを設定したのち、ご住所・所属先等のご登録情報をご確認ください。

<https://jsrecce.smoosy.atlas.jp/mypage/login>



なお、会員専用ページにログインできない場合は、学会ホームページのお問い合わせフォームよりご連絡ください。

退会をご希望の場合も、学会ホームページのお問い合わせフォームよりご連絡いただきますようお願いいたします。

リレー討論 「教育・保育の無償化—令和時代の保育学—」 V パラダイムシフトの渦中で大切にしたいこと

坂田 和子

私たちは時代の変化に伴い、見方・考え方の変容を求められることがある。その際、自ら実感を伴って変容していく場合と、そうしなければならないので変容する場合とは感じ方や納得感が大きく異なる。

また、時代変化のスピード感について、客観的な時間評価と一人一人が感じる主観的時間感覚も同じではない。「十年一昔」、この四字熟語は世の中の移り変わりが激しいことの例えである。私たちにとって、ひと昔とはどのくらいの年月なのでしょう。5年3年とを感じる人がいる一方で、不測の事態を経験した人々にとっては時計の針が止まったままかもしれない。

社会構造の変化が急速に表面化し、社会・経済・環境などの様々な課題に直面し、不確実性が高い状況下において、「わたしたち」が求められている変化への対応。変化を好まない性質をもつ人間が、「教育・保育の無償化」をどのように受けとめ、その課題を乗り越えようとする時に大切にしたいことを論じてみる。

「無償化」の議論とVUCA時代の到来

教育における「無償化」について、義務教育学校以外のその始まりは高校授業料無償化であったことが思い出される。時の政権は、公立学校の授業料免除と、私立学校生徒への就学支援金支給を実現し、その後現政権に交代し所得制限が加わりながら現在に至っている。この無償化が比較的社会的な混乱を招かなかったのは、無償化の対象が文部科学省管轄の学校に関する「授業料無償化」だったことに尽きるのではないだろうか。

その10年後の2020年10月、就学前の学校・施設・園等への「教育・保育の無償化」がスタートした。国は新しい経済政策パッケージとして「人づくり革命」を進め、人材への投資として子育て世代、子ども等に大胆な政策資源を投入することを示し、その財源が消費税率の引き上げから拠出されることとなった。そして社会経済が低迷している中での増税に対する否定的な感情は「誰が得をするのか」「対象にならない怒り」など、線引きをめぐる社会的な議論となった。

また、基本方針に記述されている通り、「一気に加速化」したことと、管轄が一元（福祉、教育等）でないこと、そして就学前の「何に対して」行うかなど、その内容が複雑であった。「教育・保育の無償化」が子どもの学びに対する公平性（Equality）と教育・保

育の質（quality）を保障する政策として、そしてリレー討論Ⅲで太田氏が指摘している通り子どもの最善の利益を最優先する子育て支援であれば積極的に歓迎するものの、課題は山積している。

ある園で保護者が担任に「先生、無償化助かったー。おかげでスタッドレスタイヤを買い換えることができたんよ」と話していたところをたまたま園長が耳にし、「なんだかがっくりきました」と重々しく語っていた。子どもの学びのために使われていない「教育・保育の無償化」は、保育者の無力感を増す。

また地方財政の逼迫と少子化の中で運営している公立園は、無償化を機に今まで以上に在り方を問われ、議論に拍車がかかり急速に閉園などに向かっていくことを目の当たりにしている。

「わたしたち」は、そのような保育者の感じ方を受けとめ、ともに考えることが叶っているのだろうか。

時代はVUCA（Volatility：不安定性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）が急速に進展しており、問題を解決するためのパラダイムシフトが求められている。リレー討論Ⅰで中坪氏が指摘しているように、〈拡張〉と〈縮小〉をもたらす「教育・保育の無償化」について、保育学は新たな在り方や価値を分かち合うことを求めているかもしれない。その新たなパラダイムを丁寧に記述し、社会にわかりやすく説明しつつにはどうしたらよいだろうか。そのようなことを考えている時に、ふと頭に浮かんできたのは子どもの学びの場での実践であった。

『いま』を生きる子どもが安心して生活する場から学ぶ

ある日の保育所3歳児クラスでのエピソードである。Rくんは片手で持つ「何か」をつくっていた。ブロックを組み合わせ、つくりあげては握り心地を試しつつ、微調整を繰り返しながら黙々と試行錯誤すること約20分。その後すっと立ち上がり、保育室で遊んでいる子どもに近づき、その「何か」をおでこにもっていくと……、

「ピッ、36ど、だいじょうぶで一す」
……なるほど、非接触型検温器！—この検温器は、後にクラスで展開していくお店屋さんごっこで大活躍し、子どもが「ピッ、36ど、だいじょうぶで一す」と言う度に子どもも担任も笑顔になり、保育室の空気が穏やかになり、あたたかい雰囲気になっていった。

そして担任はこのエピソードを、「感染予防、子どもの生活に浸透中！」という学びの姿として見取り、

保護者と共有していた。安心で安全な空間で、『いま』を繰り返し繰り返し味わい、夢中になり遊びに没頭しながら創りだされる「子どもにとって意味のある何か」をみて、子どもが『未来』を創りあう存在になるであろうという逞しさを感じる。そして子どもの遊びの行為の意味と価値を見取り、保護者に伝え、子どもと保護者を『つなぐ』存在としての保育者に頼もしさを感じる。子どもが「わたし」として育つには、「わたし以外の人や環境」が必要で、「わたしたち」の中で子ども一人一人の個性やよさがあらわれてくることを実感する。それが教育・保育の場で展開されていることなのである。

子どもを中心としたステークホルダーでありproactiveな保育学の探究者として

子どもの権利条約が反映された児童福祉法の理念において、私たちは誰もが子どもを中心としたステークホルダー（利害関係者）である。保育者養成に関わる立場としての「わたし」は、一人でも多くの学生と保育の豊かな世界を分かち合いたい。そして保

育者とともに学び合い、その場に学生を含むステークホルダーが入ることを期待している。OECDは、「Future of Education and Skills 2030」において、様々な課題に向けた解決の検討と持続可能性の確保、個人・集団のウェルビーイングの追求、学ぶ者のエンジェンシーについて言及している。

現行小学校学指導要領において、主体性の英語表記はproactivityである。activeでなく、さらに積極的で先に進もうとするproactiveである。

私たち一人一人が世界や社会の構成員として「わたし」を大切に、「わたしたち」のウェルビーイングを追求するために、proactiveな保育学の探求者であることが必要なのではないだろうか。

●Profile

坂田 和子（さかた かずこ）
福岡女学院大学・大学院 教授
専門は発達心理学、認知科学
様々な環境と人間の「接面」や「相互作用」、「つながる」ことなどに関心がある。また、「みる、見る、観る、看る、診る、触る」ことの人間らしさを研究している。

新刊図書の紹介

このコーナーは、会員諸氏が読まれた多様なジャンルの図書を保育学の視点から紹介していただき、保育研究と保育実践の発展のための一資料を提供することを目的とします。

『「伝えあい保育」の人間学—戦後日本における集団主義保育理論の形成と展開—』

吉田直哉 著

2021年3月20日 ふくろう出版

本書は、海外の影響を受けつつ発展してきた日本の「伝えあい保育」の理論的展開について、詳細に分析・考察されたものである。本書の特色は、『「伝えあい保育」の理論のうち、その基礎・基盤をなす人間認識、人間観に着目する点』にある。

吉田氏が『「伝えあい保育」を創り上げようという動機は、戦後日本という時代状況の中で、主流を占めたパラダイムに対するアンチテーゼを提示しようというものであった』と指摘するように、「伝えあい保育」の展開は、経験主義教育の展開とその対峙の中で形成されてきたという面がある。そういった視点から本書を見ていくと、保育現場の実際（人間・社会）を見据えて、「何が今必要なのか」という観点から保育理論を構築していくことの重要性を再認識させられる。

「伝えあい保育」に関わる人物について、一人一人その保育思想をまとめ、提示している点も特筆に値する。

濱中 啓二郎（貞静学園短期大学）

『大人につきあう子どもたち—子育てへの文化歴史的アプローチ（越境する認知科学4）』

伊藤 崇 著

2020年5月 共立出版

本書のメッセージはとてもシンプルだ。「子どもは大人につきあっている」である。保育者や親の立場からすると、子どもに寄り添っているのは大人だと考えがちである。しかし、本書は、ケアのなかでこそ子どもは有能さを発揮すると言う。

例えば、お誕生会。子どもたちは「呼びかけあう」という保育者が要求していない遊びをしながら、座り続けていた。一般的に、保育者による指導の成果、もしくは、子どもたちの育ちと理解される場面で、著者は、一つの活動とそこにある動機の違이에着目する。お誕生会という活動を保育者と子どもとが協働で成立させていたと理解するのである。このような視点にたった場合、子育てという営みは、子どもの努力や寄与によって達成されていると本書は言う。

筆者が描く「大人につきあう子どもたち」は、単に子どもの有能さを提示する素朴な子ども中心主義とは異なる、文化歴史的アプローチの可能性を示してくれている。

岡花 祈一郎（琉球大学）

学 会 記 事

■2020年度事業報告

2020年度は、まさにコロナにふりまわされた一年となりました。研究のために幼稚園・保育所・認定こども園などでデータをとることも困難になり、大学等での授業もオンライン化が要請されるなど、慣れない対応に明け暮れた一年だったと思います。保育の現場も緊張を強いられる時期が長く続きました。しかし、コロナに必死に対応する中で、保育の内容や形式、制度等について、より原点に戻って考える機会が増えたことも事実です。このことを保育研究にぜひ生かしていきたいという機運が高まった一年でもありました。危機をチャンスにできるかどうかが試されています。

大会は、2年続いて現地開催ができなくなりました。しかし本年度は昨年度のように実際の発表をなくすのではなく、ネットを活用して発表していただき、当日はその発表に基づく議論をオンラインですという形を採用しました。富山の実行委員会の面々の努力によるものです。新しい試みですが、これが学会の発表や議論の形式、形態の新たな発展につながるものが課題になっています。

コロナ禍で参集することが困難な一年でしたが、各委員会は原則的に活動していただきました。特に政策検討委員会はあらたにたちあげたにもかかわらず熱心に取り組んでいただき、公開のシンポにも多くの学会員の参加がありました。期待の大きさを多くの関係者が感じたと思います。この委員会の仕事は今後も大事になっていくと思われます。またブロックの取り組みも一部で熱心に行われました。この傾向は、これからより重視していくことになると思われます。

新理事による学会運営の初年なので、種々不慣れ等があったと思いますが、コロナ禍でも、任務を担われたことに感謝です。事務局の専従体制を整え、事務局長を中心に大会実務も一部事務局が担うという形に切り替えての一年でした。種々課題は残されていると思いますが、運営の合理化は確実に進んでいると考えます。

一方で、会員の増加による大会参加者の増加、コロナ禍による大会運営のオンライン化、これまでの財務状況の捉え方等々があり、今後、財務状況の健全化に向けた取組が必要と考えます。

1. 第73回大会の開催

(1) 大会テーマ：「保育の“とこしえ”と“うつろい”」

期日：2020年5月16日（土）、17日（日）

会場：奈良教育大学、なら100年会館には参集せず

大会実行委員長：横山真貴子

口頭発表：262件、ポスター発表：749件、自主シンポジウム：66件

大会研究発表総数：1,011件

(2) 主たる企画（動画掲載）

・大会基調講演「ヒトの心の成り立ちをたどる一発達と進化の基盤」明和政子（京都大学）

・大会実行委員会企画

「SDGsとこれからの日本の保育」汐見稔幸（日本保育学会 会長）

「倉橋惣三の保育論から考える現代の『新と真』」大豆生田啓友（玉川大学）

2. 第74回大会準備

期日：2021年5月15日（土）16日（日）

会場：オンライン開催

大会実行委員長：富山大学 小林真

3. 第75回大会準備

期日：2022年5月14日（土）15日（日）予定

会場：オンライン開催

大会実行委員長：千葉聖徳大学 阿部真美子

4. 学会誌『保育学研究』の発行

(1) 第58巻第1号、第2・3号合併号の発行（第3号特集テーマ：保育の場における現職教育のあり方について）

(2) 第59巻の投稿受付と発行準備（第3号特集テーマ：保育者のキャリア支援）

(3) 第60巻の募集と発行準備

（第3号特集テーマ：保育の質の向上及び子育て支援の充実に向けた取り組み―地域レベルの試みに焦点を当てて―）

5. 社員総会、評議員会、理事会の開催

(1) 社員総会及び理事・評議員会、地区ブロック評議員会（オンライン）の開催

(2) 理事会（4月11日、7月25日、9月12日、2月11日）の開催

6. 名誉会員の認定

穴戸健夫先生

7. 各種委員会の開催

開催した委員会：編集常任委員会 国際交流委員会 課題研究委員会 広報委員会 保育政策検討委員会 組織検討委員会 大会検討委員会 研究奨励賞推薦委員会及び同選考委員会 保育学文献賞推薦委員会及び同選考委員会 倫理問題調査委員会

8. 『日本保育学会会報』の発行

第177号、178号、179号の発行

9. 日本保育学会研究奨励賞の授与

第73回大会（奈良）が参集しない形での開催だったため、2021年第74回大会（富山）にて授与

10. 日本保育学会保育学文献賞の授与

第73回大会（奈良）が参集しない形での開催だったため、2021年第74回大会（富山）にて授与

11. 研究集会開催の助成

九州・沖縄地区ブロック

「幼保小接続の実際と今後の方向性」2021年3月13日 於オンライン (Zoom)

中部地区ブロック

「不思議や謎に挑戦する子どもたち—これからの保育ができること—」2021年3月14日 於オンライン (Zoom)

12. 国際交流

(1) 韓国嬰幼兒保育学会及び韓国幼児教育学会との学術交流

(2) 主要国際保育系学会への若手会員派遣の募集

(3) 国際保育資料データベースの収集

■2021年度事業計画

昨年度と同じように、2021年度もしばらくコロナ禍を念頭に置いた学会運営が続くと思われます。各委員会の仕事は、参集が困難な中でも原則的に続けていきます。ネット環境の整備や記録が課題となるでしょうが、事務局の仕事の重要性が増します。特に政策検討委員会は昨年度に続き大事な課題を背負っていくでしょう。国が「こども庁」の創設をうたいはじめたことが、これからの政策的な焦点になっていく可能性があり、それに対する本学会のかかわりが問われるようになることは間違いありません。行政的な整備問題は政策検討委員会だけではなく、他の委員会でも検討が必要になるでしょう。

保育の実践現場では、質の向上が政策的なテーマになっていますが、学会としてもこの問題を学会らしい形で検討研究をしていきたいと思えます。編集常任委員会では、昨今増えつつある論文の不正疑惑の訴えへの対応を検討することがテーマになっています。国際委員会では韓国からの参加要請に積極的に応じるとともに、今後の学会活動の国際化について前向きな検討が課題となるでしょう。電子投稿に伴って起こっている採用問題等についても同じで、新たな原則的な確認の検討が引き続き課題になります。

大会は千葉聖徳大学を拠点に開かれますが、コロナ問題を勘案すると、千葉大会もオンライン開催ということになる可能性が大きいと考えられます。オンライン開催となった場合の参加者の減少を防ぎつつ、学会の新たな形の追求が新たなテーマになります。また大会開催に伴う財政支出がこの間大きくなってきたことを今後どう防ぐかも検討課題になるでしょう。

これと関連して事務局体制の引き続く強化が課題になります。確立してきた事務局体制をさらに発展させるために、状況に応じて派遣職員を採用するなどの案の検討も大事になっています。

1. 第74回大会の開催

(1) 大会テーマ：「つながる、広がる、深まる」

期日：2021年5月15日(土) 16日(日)

会場：オンライン開催

大会実行委員長：富山大学 小林真

口頭発表：188件、ポスター発表540件、自主シンポジウム：52件

大会研究発表総数：780件

(2) 主たる企画

・大会基調講演「発達の格差と保育の役割」森口佑介(京都大学大学院文学研究科 准教授)

・大会実行委員会企画

「小学校との円滑な接続を目指して—富山県内の取り組みから—」

「多様なまなざしで、子どもを育む—つながることで、保育の質を高める—」

「子どもとの会話が今よりもっと楽しくなる！～安心感いっぱいのにこにこコミュニケーション～」

・国際シンポジウム「ドイツにおける保育の現状と質の維持について—乳児保育の視点から—ドイツのコロナ禍の保育について—」スザンヌ・フィーニッケル(ライプツィヒ大学)

・学会企画シンポジウム2件：

編集常任委員会「実践研究へのいざないⅢ—主観性と客観性の対立を越える道を探る—」

課題研究委員会「新型コロナウイルス下における保育実践—実践の工夫と課題—」

2. 第75回大会準備

大会テーマ：「アーリー・スタート～非認知能力研究の知見を保育に生かす～」

期日：2022年5月14日(土) 15日(日) 予定

会場：オンライン開催

大会基調講演：遠藤利彦教授(東京大学大学院教育学研究科 総合教育科学専攻 教育心理学講座教授)

大会実行委員長：千葉聖徳大学 阿部真美子

3. 第76回大会準備(九州・沖縄ブロック)

期日：未定

会場：未定

大会実行委員長：未定

4. 学会誌『保育学研究』の発行

(1) 第59巻 第1号・第2号・第3号の発行(第3号特集テーマ：保育者のキャリア支援)

(2) 第60巻の投稿受付と発行準備

(第3号特集テーマ：保育の質の向上及び子育て支援の充実に向けた取り組み—地域レベルの試みに焦点を当てて—)

(3) 第61巻の募集と発行準備

(第3号特集テーマ：持続可能な社会と保育—SDGs時代の保育を考える—)

5. 社員総会、評議員会、理事会の開催

(1) 社員総会及び理事・評議員会、地区ブロック評議員会の開催

- (2) 理事会 (4月17日、9月、2月開催日未定) の開催
6. 名誉会員の認定
7. 各種委員会の開催
- 開催予定の委員会：編集常任委員会 国際交流委員会 課題研究委員会 広報委員会 保育政策検討委員会 組織検討委員会 大会検討委員会 研究奨励賞推薦委員会及び同選考委員会 保育学文献賞推薦委員会及び同選考委員会
8. 『日本保育学会会報』の発行
- (1) 第180号、181号、182号の発行
9. 日本保育学会研究奨励賞 (発表・論文部門) の授与
10. 日本保育学会保育学文献賞の授与
11. 研究集会開催の助成
12. 国際交流
- (1) 国際シンポジウムの開催
- (2) 韓国嬰幼兒保育学会との学術交流および韓国幼児教育学会国際学術大会における発表
- (3) 主要国際保育系学会への若手会員派遣の募集
- (4) 国際保育資料データベースの収集
13. その他
- (1) その他必要な事業

貸借対照表

令和3年3月31日 (単位：円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	26,898,984	21,616,174	5,282,810
貯蔵品	739,106	769,010	
前払費用		174,219	△174,219
仮払金	1,700,000	2,700,000	△1,000,000
流動資産合計	29,338,090	25,259,403	4,078,687
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
その他基本財産	34,056,526	34,054,483	2,043
基本財産合計	34,056,526	34,054,483	2,043
(2) 特定資産			
その他積立資産	12,433,222	12,432,388	834
特定資産合計	12,433,222	12,432,388	834
(3) その他固定資産			
什器備品	71,393	133,811	△62,418
敷金	1,113,200	1,113,200	0
長期前払費用	128,334	18,000	110,334
その他固定資産合計	1,312,927	1,265,011	47,916
固定資産合計	47,802,675	47,751,882	50,793
資産合計	77,140,765	73,011,285	4,129,480
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	5,040	1,396,920	△1,391,880
前受金	229,000	722,000	△493,000
未払法人税等	70,000		70,000
未払消費税等	144,600		144,600
預り金	127,841	279,418	△151,577
流動負債合計	576,481	2,398,338	△1,821,857
負債合計	576,481	2,398,338	△1,821,857
II 正味財産の部			
一般正味財産	76,564,284	70,612,947	5,951,337
(うち基本財産への充当額)	(34,056,526)	(34,054,483)	(2,043)
(うち特定資産への充当額)	(12,433,222)	(12,432,388)	(834)
正味財産合計	76,564,284	70,612,947	5,951,337
負債及び正味財産合計	77,140,765	73,011,285	4,129,480

正味財産増減計算書

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで (単位：円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
①基本財産運用益			
基本財産受取利息	2,593	2,592	1
②特定資産運用益			
特定資産受取利息	1,054	1,056	△2
③受取入会金			
受取入会金	312,000	500,000	△188,000
④受取会費			
受取会費	41,056,500	44,434,800	△3,378,300
⑤事業収益			
事業収益		27,652,980	△27,652,980
学会誌売上高	1,137,000		1,137,000
刊行物売上高	12,200		12,200
大会収益	18,070,500		18,070,500
⑥受取寄附金			
受取寄附金		14,000	△14,000
⑦雑収益			
受取利息	1,431		1,431
雑収益	4,204,979	7,360	4,197,619
経常収益計	64,798,257	72,612,788	△7,814,531
(2) 経常費用			
①事業費			
臨時雇賃金		3,979,500	△3,979,500
福利厚生費		9,776	△9,776
会議費	100,664	838,443	△737,779
旅費交通費	244,458	2,812,616	△2,568,158
通信運搬費	5,142,186	4,027,804	1,114,382
消耗品費	93,539	953,777	△860,238
印刷製本費	4,980,851	10,677,649	△5,696,798
賃借料	38,500	3,595,922	△3,557,422
諸謝金	177,053	908,390	△731,337
賞金・助成金・分担金	236,113	594,449	△358,336
委託費	17,311,627	35,353,438	△18,041,811
雑費	5,493	17,210	△11,717
②管理費			
給与手当	15,037,760	11,102,176	3,935,584
法定福利費	2,265,727	2,120,555	145,172
福利厚生費	24,233	38,322	△14,089
その他人件費	360,000	585,508	△225,508
接待交際費	3,240	8,640	△5,400
会場費	24,060	487,214	△463,154
旅費交通費	497,113	2,101,867	△1,604,754
通信運搬費	743,300	1,428,612	△685,312
減価償却費	62,419	290,884	△228,465
消耗什器備品費	1,146,397	305,708	840,689
消耗品費	468,113	759,001	△290,888
印刷製本費	26,400	3,481,696	△3,455,296
水道光熱費	129,087	135,359	△6,272
賃借料	4,484,354	3,928,171	556,183
保険料	27,790	21,070	6,720
諸謝金	1,687,995	902,204	785,791
租税公課	606,150	591,800	14,350
雑費	12,400	30,483	△18,083
支払手数料	907,220	914,483	△7,263
委託費	1,896,928	757,500	1,139,428
慶弔費	35,750	51,403	△15,653
経常費用計	58,776,920	93,811,630	△35,034,710
当期経常増減額	6,021,337	△21,198,842	27,220,179
税引前当期一般正味財産増減額	6,021,337	△21,198,842	27,220,179
法人税等	70,000		70,000
税引後当期一般正味財産増減額	5,951,337	△21,198,842	27,150,179
一般正味財産期首残高	70,612,947	91,811,789	△21,198,842
一般正味財産期末残高	76,564,284	70,612,947	5,951,337
II 正味財産期末残高	76,564,284	70,612,947	5,951,337

1. 重要な会計方針

- (1) 棚卸資産の評価基準及び評価方法
個別法

- (2) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産

定率法を採用しています。なお、平成10年4月1日以降取得した建物（附属設備を除く。）及び平成28年4月1日以降取得した建物附属設備並びに構築物については、定額法を採用しています。

- (3) その他計算書類の作成のための基本となる重要事項

①消費税等の会計処理

税込経理方式によっています。

②リース取引の処理方法

リース物件の所有権が借り主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引にかかる方法に準じた会計処理を行っています。

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

(単位：円)

科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
預貯金	34,054,483	2,593	550	34,056,526
小 計	34,054,483	2,593	550	34,056,526
特定資産				
研究奨励賞積立資産	6,981,083	592	220	6,981,455
保育学文献賞積立資産	5,451,305	462		5,451,767
小 計	12,432,388	1,054	220	12,433,222
合 計	46,486,871	3,647	770	46,489,748

3. 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。

(単位：円)

科 目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
什器備品	884,751	813,358	71,393
合 計	884,751	813,358	71,393

2021 年度 収支予算書

自 2021/4/1 至 2022/3/31

I 事業活動収入の部

(単位：円)

勘 定 科 目	2021 年度予算
【基本財産運用益】	
基本財産利息収入	2,000
【特定資産運用益】	
特定資産利息収入	1,000
【受取入会金】	
受取入会金	300,000
【受取会費】	
受取会費	42,600,000
【事業収入】	
大会参加費等	15,360,000
【受取寄付金】	
受取寄付金	0
【雑収益】	
雑収益	1,000
事業活動収入	58,264,000

事業活動支出の部

1. 事業費支出

勘 定 科 目	2021 年度予算
臨時雇賃金	210,000
福利厚生費	10,000
会議費	210,000
旅費交通費	110,000
通信運搬費	4,930,000
消耗什器備品費	0
消耗品費	60,000
印刷製本費	11,960,000
賃借料	510,000
諸謝金	610,000
賞品・助成金・分担	920,000
委託費	16,750,000
雑費	60,000
事業費支出計	36,340,000

2. 管理費支出

勘 定 科 目	2021 年度予算
給料手当	15,500,000
法定福利費	2,500,000
福利厚生費	50,000
その他人件費	400,000
接待交際費	10,000
会議費	10,000
旅費交通費	510,000
通信運搬費	360,000
消耗什器備品費	210,000
消耗品費	510,000
修繕費	100,000
印刷製本費	60,000
水道光熱費	150,000
賃借料	3,460,000
保険料	30,000
顧問料	2,200,000
租税公課	500,000
雑費	40,000
振込手数料	1,460,000
委託費	2,160,000
慶弔費	50,000
管理費支出計	30,270,000
事業活動収入計	58,264,000
事業活動支出計	66,610,000
事業活動収支差額	△8,346,000
II 投資活動収支の部	
投資活動収入	0
投資活動支出	0
投資活動収支差額	0
III 財務活動収支の部	
財務活動収入	0
財務活動支出	0
財務活動収支差額	0
IV 予備費支出	
当期収支差額	△8,346,000
前期収支差額	0
次期収支差額	△8,346,000

各種委員会報告

■編集常任委員会

2020-6/7 7/12 12/6

2021-1/11 1/22 2/22

- 『保育学研究』誌の発行と編集
第58巻第1号～第3号の発行
特集テーマ：保育の場における現職教育のあり方について
展望：グローバル社会に向けた日本の保育のこれから
保育フォーラム：保育学の研究方法論を考える
(4) 保育実践の「知の考古学」
第59巻第1号～第3号の投稿受付
- 編集常任委員会企画シンポジウム開催
第74回大会において「実践研究へのいざないⅢ～主観性と客観性の対立を越える道をさぐる～」というテーマで開催した。
- 電子投稿に向けた取り組み
第59巻の投稿はそのほとんどが電子投稿となった。第60巻からは電子投稿のみとなるため、「執筆要項」「論文執筆のための手引書」「電子投稿マニュアル(執筆者用)」「投稿前確認事項」の改訂を行った。また、「引用文献表記」の提示など、執筆者が戸惑うことなく投稿できるよう対策を行った。

(文責：小川 清実)

■国際交流委員会

2020/10/1～2021/06/30

- 日本保育学会第74回大会国際シンポジウムを国際交流委員会、大会実行委員会、OMEP日本委員会の共同で企画した。テーマは「ドイツにおける保育の現状と質の維持について一乳児保育の視点から／ドイツのコロナ禍の保育について」で、基調講演はSusanne Viernickel氏(ライプツィヒ大学)、指定討論は秋田喜代美氏(学習院大学)、中西さやか氏(佛教大学)であった。第73回大会で取り下げたことを受けて開催した。
- 主要国際保育系学会等への若手会員派遣支援について、1期(2～5月)に1件の申請があり採択された。
- 学会Webサイト「諸外国の幼児教育ガイドライン」に、フランスの幼児教育を掲載した。
- 第3回国際学会若手会員派遣ワークショップについて、2021年5月23日(日)オンラインで開催した。先着100名で申込受付を開始したところ、20日足らずで定員に到達した。実際の参加者は61名であった。参加者の満足度は高かった。

(文責：中坪 史典)

■課題研究委員会

2020-10/8 11/30

2020-4/9

委員会では、新型コロナウイルス下における保育実践の工夫と課題について、アンケート調査、実践の記録やインタビュー等による質的研究を行った。

日本保育学会第74回大会(富山大学)において、「新型コロナウイルス下における保育実践―実践の工夫と課題―」について発表した。研究報告者は、新井美保子(愛知教育大学)、花輪充(東京家政大学)、三宅茂夫(神戸女子大学)で、東京都、愛知県、兵庫県における状況について発表した。司会は西山修(岡山大学)で、説明趣旨は佐々木晃(鳴門教育大学附属幼稚園・課題研究委員会委員長)であった。

(文責：佐々木 晃)

■広報委員会

日本保育学会広報委員会では、2020年7月より2021年4月までに、会報179号、180号を発行した。

179号では、特集として「新しい生活様式を取り入れた保育」を7名の会員から寄稿いただいた。180号では、「今、保育のあり方を再考する」として6名の会員から寄稿いただいている。ご承知の通り、本年度はコロナ禍の中で、さまざまな制約を受け日々を生活している。このような状況下で、広報委員会としては、社会的状況の中で変化し対応を迫られること、同時に、どのような社会的状況の中でも変えてはならないこと、この2つの側面があると議論していた。その議論が179号、180号の2つにあらわれていると改めて気付かされる。会員の皆様には、ぜひ再読していただければ幸いである。

現在、181号の編集が終わり、182号への編集作業が進んでいる。

(文責：上田 敏丈)

■研究奨励賞選考委員会(大会発表部門)

2020年7月～2021年4月

発表部門推薦委員会 開催なし

発表部門選考委員会 開催なし

第73回日本保育学会大会(近畿ブロック)は奈良教育大学を中心として開催される予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症対策として開催は中止となり、発表は論文集掲載をもって業績として認められることとなった。したがって、当日発表やオンライン発表はなく、座長の選任および発表部門推薦委員会の開催は叶わぬこととなった。したがって、今年度の研究奨励賞対象者はなしとなった。このことについて、2021年1月9日研究奨励賞選考委員会(大会発表部門)をオンライン開催し確認、

理事会、理事・評議員会に報告し、承認を得た。

(文責：大方 美香)

■日本保育学会研究奨励賞

論文部門選考委員会 2021/1/7

2020年度「研究奨励賞（論文部門）」の候補対象に該当する論文は、『保育学研究』第58巻掲載論文のうち13編であった。それらの論文のなかから第一次審査として4件を選出した。さらに本委員会において第二次審査を厳正に実施した結果、庭野 晃子「保育従事者の離職意向を規定する要因」の1編を当該賞候補として決定して理事会に推挙することとした。そのうち理事会にて承認を受け確定した。

(文責：西本 望)

■保育学文献賞選考委員会

2020-12/23

当該委員会は、規定に則って2019年5月1日から2020年4月30日までに発刊された保育学の発展及び保育実践の向上にとり非常に有意義である優れた単行本として、次の2点を選定した。1. 川田学（著）『保育的発達論のはじまり—一個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ—』ひとなる書房、2019年8月刊。2. 青木久子、松村和子（著）『トボスの経営論理』萌文書林、2019年12月刊。以上について、当該委員会は保育学文献賞候補として、理事会及び理事・評議員会に提案し、承認を得たことを報告する。

(文責：田中 敏明)

■倫理問題調査委員会

保育学研究論文およびポスター発表論文に関する2件の疑義が会員からの匿名の投稿があり、理事会は倫理問題調査委員会を発足した。倫理調査委員会は2件について、詳細の調査を行った。2020年4月11日日本保育学会理事会に提出し、審議を経て1件に関しては承認された。もう1件に関しては再審議を行い、理事会において承認された。

(文責：大豆生田 啓友)

■大会検討委員会

2020年8月30日の10:00~12:00 web会議を行った。内容は以下の通り。1. 第73回大会について 2. 第74回大会について 3. 第75回大会について 4. その他 であった。具体的には、実施運営上の共通理解や懸案事項の検討等を行った。特に大きな論点としては、具体的な実施方法のほか、オンライン開催の方法、業者への委託に関する件等であった。学会事務局との新たな連携体制についても議論を行った。また、2021年4月10日の18:30~20:00に臨時の大会検討委員会を開催し、第75回大会の大会参加費および、その他の検討を行った。

(文責：大豆生田 啓友)

■組織検討委員会

2021/7/2

保育にかかわる政策の動きに学会として敏速に対応できるようにするため、常設の委員会に加えて、臨時の委員会として「政策検討委員会」を置くこととした。また、課題検討委員会においては、喫緊の課題である「コロナ禍の保育」をテーマに検討を依頼することとした。

また、大会運営との連動を確保するため会員管理システムの変更を行った。

また、学会の健全な財政運営のため、学会の予算・決算について専門的な立場からアドバイスを受けられるよう税理士を交代し、一般社団法人としてのガバナンス強化のため社労士、司法書士の交代、場合に応じて弁護士の助言も受けられるよう管理部門の整備を行った。

以上、すべて理事会の議を経て実行された。

(委員長：汐見 俊幸、文責：戸田 雅美)

■保育政策検討委員会

2020/9/21, 10/10, 11/1, 2021/1/9, 3/14

本委員会は9月に新たに設置された委員会であることから、まず本委員会の趣旨やあり方および本年度委員会事業を検討した。そして、まずは会員に対し、多くの会員が関心を持っていると判断される保育の質に関わる国内の政策動向をし、国並びに基礎自治体レベルで議論するシンポジウム「保育・幼児教育の質の向上のための政策」を企画した。そしてシンポジウムを企画し、委員会としての提案資料の作成準備を委員会として行った。そして2021年3月14日に予定通り、公開シンポジウムを開催した。

(文責：秋田 喜代美)

■ 第75回大会開催（予告） ■

2022年5月14日（土）・15日（日）
聖徳大学：オンライン開催（関東ブロック）

◆第75回大会のお願い及び注意事項

- ・会場数に限りがございます。自主シンポジウムは50件、口頭発表は200件、ポスター発表は800件の制限を設けています。申込件数が大幅に超えた場合には、抽選を行います。
- ・各種申込みは、大会ホームページよりWeb登録となります。期日や提出物に不備がある場合は、受理できませんのでご注意ください。
- ・申し込みをする際には、メールアドレスによる会員認証が必要です。
- ・大会参加費が変更となりました。金額をご確認の上、お支払いください。

◆研究発表について

- ・発表時には、未発表であるものに限りです。発表申込み・発表論文集原稿提出以降、発表前に他団体において印刷・公表された研究は、発表することができませんので、ご注意ください。
- ・筆頭発表は1人1回に限りです。連名発表者となる場合には、筆頭発表も含めて3発表まで認められています。
- ・1発表は筆頭発表者を含め10名を上限とします。
- ・発表の際、筆頭発表者は必ず出席しなければなりません。ただし、連名発表者の出席は必須としません。
- ・発表申込みに際しては、本学会の大会研究発表に関する規程を遵守してください。大会終了後、審査の結果、違反のあった場合は、発表取り消しのご連絡をする場合があります。日本保育学会倫理綱領に基づいた発表をお願いいたします。
- ・発表申込みの受理結果は、2021年11月下旬に大会ホームページに掲載いたします。会員各自で、ご確認ください。

◆自主シンポジウムについて

- ・登壇は1人1件です。
- ・連名登壇者が非会員である場合、その方の大会参加費を、筆頭登壇者が2021年11月30日までに納入してください。

◆発表論文集原稿について

- ・発表論文集原稿の分量は、1発表につき、A4判2枚です。およその分量を満たしていない原稿は、受理されない場合がありますのでご注意ください。

	自主シン ポジウム	口頭・ ポスター 発表	大会参加のみ (早期参加登録)
学会年会費の納入	2021年9月30日		2021年9月30日
大会参加申込	2021年10月26日 ～11月15日		2021年10月26日 ～2022年1月20日
企画・発表申込	2021年10月26日 ～11月15日		—
大会参加費・発表登録 費・自主シンポジウム 開催登録費納入	2021年11月30日		2022年1月20日
原稿登録期限	2022年1月10日		—

第75回大会ホームページ
<http://confit.atlas.jp/hoiku75>



編集後記

無事に第181号をお届けできたこと、感謝申し上げます。

本号では、初のオンライン学会となった第74回大会についての報告と、同時に理事会で選出されました新会長の秋田先生の挨拶をお届けいたしました。

早いもので、昨年度の理事会において、広報委員となり、コロナ禍の中、オンラインでの会議を重ね、無事に会報誌をお届けできておりますこと、事務局、広報委員の皆様へ、改めてお礼申し上げます。引き続き、会員の皆様へ有益な情報をお届けできるよう委員会一同頑張っていきたいと思っております。

上田 敏文

編集：広報委員会

上田敏文 天野美和子 有村玲香 伊藤能之 木村創 森田健宏 淀川裕美

広報委員会協力委員

今津尚子 佐久間美智雄